題名だって悩んで決めるし

What's in a name?

吉岡 乾（よしおか のぼる） 民博 民族社会研究部

ことばの機能のひとつに、事物や概念に名前を与え、指し示すという働きがある。名前とは不思議なもので、対象それ自体とは直接何の関係もない符号なのに、それをそれとよぶ黙契のあるコミュニティのなかで、その対象をあらわす為に使われるのだ。

人は何にでも名前を付けたがる。何に対して、どういう動機で名前を付けるか、或いは付けないか、名前に対してどういう態度を取るかなど、文化によってさまざまに違えど、少なくとも必要最低限、命名をするものだ。

異言語文化圏で生活をするとなると、名前が発音し難い、コミュニティに参入し易くなるなどの理由から、綽名（あだな）を与えられることが間々ある。調査地でわたしに綽名が付けられたとき、「お前の名は『gusúmalkiṣ』だ」と言われた。ブルシャスキー語で「尻尾の奴」といった意味だ。当時、わたしは後ろ髪だけが長く、三つ編みにしたそれを「尻尾」と見ての名前である。但しこれは、自己紹介なら「わたしは『asúmalkiṣ』だ」となるし、第三者に言わせれば「あいつは『isúmalkiṣ』だ」となる。尻尾の持ち主が誰かに合わせて「尻尾」という語の語頭が変化するので、「尻尾の奴」も同様に、視点によって語形変化するのだ（gu-súmal-kiṣ［お前の-尻尾-的な］）。

名前に本質はない。かのシェイクスピアも、ジュリエットをしてそう言わしめた。

〝手でも、足でも、腕（かひな）でも、面（かほ）でも無い、人の身に附いた物ではない。（…）**名が何ぢゃ？** 薔薇の花は、他の名で呼んでも、同じやうに善い香（か）がする。〟（第二幕第二場、坪内逍遙訳）

果たして本当にそうだろうか？ 薔薇ではないが、ジャスミンの花の匂いを甘く嗅げるのは、ジャスミンが「薄ら大便臭の木」という名称ではないからではないだろうか。そんな名前の木の匂いでも、善い香だと好めただろうか。「ワンニャンハウス」なんて名の焼肉屋を開いて、客は見込めるだろうか。「サル」と名付けられた犬が居るだろうか。ロミオが「Windows Me」で、ジュリエットが「ペッペッペッ」という珍奇ネームだったとしても、『ロミオとジュリエット』改め『Windows Me とペッペッペッ』はこんなに名を得ただろうか。

先の綽名は後々、後ろ髪を切ってからは使われなくなった。名は体をあらわす。尻尾がない奴を「尻尾の奴」とはよべない。調査地に通い始めて一〇年以上、すっかり名がとおった今は、「ノボル」、或いは無個性に「日本人」、「博士さん」などとよばれるだけになったのが、少し寂しい。と、ここまで書きつつ急に思い出して頭痛がしたが、幼少期に家で飼っていた犬の名は「トド」だった。犬なのに。

ブルシャスキー語で語頭に所有者を示すのは、身体部位など、譲渡不能所有物に限っての話である。譲渡可能なものの語頭には付かない（ún-e háa［お前-の・家］）。では、名前は？ 「名」という単語は、身体部位と同様、譲渡不能である（gu-ík［お前の-名］）。トドの詰まり、名前はその指示対象の一部であり、持ち主とは切り離せないと考えられているのだ。名前の重要性はそう否定できたものではない。